

涅槃についての研究

飯 田 敏

仏教の最大最上最終の理想境地を表現して涅槃と云い、人格的に云えば仏陀と云う事が出来る。即ち我々この世に生れて来た限り、肉体はある限り誰れしもが何んの苦も無く、安楽平和を願うのは皆同じ所である。即ち、安楽と法味の境地これが仏教徒としての理想の境界であり涅槃の世界であるが、しかしながら実際にその境界に入つて見なければその真相は、わからないが、釈尊はこの涅槃に住し、それを親しく人格の上に体现して示し下さつたので、この理想境を涅槃の都として憧憬し、それに達せんとして仏道修業を励んだので、この境地を法句経では *ananta* と云い、それを「甘露」とも「不死」とも訳している。この他大般涅槃経才三十一巻には二十五訳、大乘義章才十八巻には二十訳、四諦論には六十八訳が出てゐる。我々は生死流転の境界に漂没しているので

あるが、涅槃は不生、不死の境地である。併し釈尊と雖ども肉体を持つて居られた間は、そこに有漏業が存在していて、その体得していられた涅槃が不完全であつた。しかし入滅に於て有漏業の肉身を捨てられ、ここに初めて完全な涅槃に入られた。或はこれを大涅槃とも云う。即ち肉体の存する間を有余涅槃と云い、肉体が滅した時にはじめて無余涅槃と名づけるのである。而してこの無余涅槃界の境地は、言う迄もなく現世の涅槃の連続であり、言はば完成せられたる涅槃である。然らばこの完成せられる涅槃の境地はどんなものかと云えば、それは実は、體驗的であつて、心の想像が及ばない。何ぜかと云えば元来この境界は未達の世界であり、我々人間にとつては、唯理想とし経験を越えたものであるからである。

涅槃の原語は涅槃で *niwana* と云い、巴梨語で *nibbana* と云い、元来滅する意味であつて、火の滅する、物の滅する、何物に限ぎらず消滅するの意味である。依つて原始仏教では「涅槃とは、貪欲永く尽き、瞋恚永く尽き、愚痴永く尽き、一切の諸煩惱永く尽く、是れ涅槃と名づく」(大正二、一二六)とある様に、煩

悩の主体を挙げて、三毒即ち、貪瞋癡等の煩惱が滅尽したることが涅槃とされている如く全然消極的に解し、無為、涅槃、寂滅等と訳している。然るに大乘教に於ては、涅槃なるものを全然積極的活動的のものとしてゐる。即ち「涅槃經」によれば、その本質は普遍、常住、絶対、無限のものであつて、常楽我淨の四徳ありと説かれている。根本仏教では、涅槃は四諦中の滅諦の所顯であり、體現であるとする。「滅諦」の語原は *nirodha* を「滅」の字義に漢訳する意味は、苦集の因、即ち五蘊の「集諦」を滅するところに涅槃を顯現すると思惟したるに由て訳せるものである。*nirodha* を「滅」の字義に訳出することが涅槃の語義と一致するとの聯想に基いたものである。これによつて涅槃の語義は「滅」の意義のみより外に無いと寺本婉雅教授は云つてゐる。

この様に涅槃の語義から云えば、煩惱の火の吹き消された状態、一切の苦蘊の滅した状態を云うのであらう。したがつて、原始經典に於ても「滅」と云う消極的解釈が非常に多く、貪の滅、漏の滅尽、渴愛の排捨、煩惱の滅尽、解脱の帰処、寂靜にして樂しむべき地、有の滅等、

すべて消極的であり、従つて「何より」の涅槃か「何の涅槃」か「何の滅」か等言うが如きは殆んど必要としない。従つて唯單に涅槃とのみ云つてゐる、しかし「有余涅槃」、「無余涅槃」、「般涅槃」などの語があるが、是等は、状態としての涅槃の形容に過ぎないと思う。以上の様に仏教の最終の理想である所の涅槃は、泥洹、涅槃那とも音訳し、滅、寂滅、滅度、円寂等と意識し、又無為、無作、無生等と云い、凡ての煩惱の束縛を解脱して真理を究め、迷いの生死を超越して不生不滅の法を体得した境地である。従つて我々の主觀を精練し尽した所に顯われる道德的生活である。勿論その連続である死後をも含むものであるが、中心とする所は統一せられた主觀の真と善と美との調和点に達した生活そのものである。この生活は、生活し體驗すべきものであつてそれを形式化して吹聴すべきものでもなく、又なし得るものでもない。

現在に於て涅槃の境地と云うものが達し得がたい様に思われるのは、一般に宗教には崇古癖が常に強いものである様に、仏教もこの例に洩れず、滅後の仏教徒が亡き師匠たる釈尊を崇むあまり、釈尊と普通の人の間に、本

質的に何か異つた階段が数多くされると共に、悟が高められ、とても普通の人間では及びもつかない様にされてしまつたのである。悟は決してこの如きものであるはずはない。我々普通の人間にも許さるべきものでなければならぬであらう。

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。